

社会適応における成人発達障害当事者の困難と対処の過程

— 困り感と障害受容の観点に着目して —

張 間 来 駆

近年、発達障害の診断数が年々増加してきていることに伴い、発達障害者支援法や学校教育基本法など、支援のための様々な法整備が行われている。しかし一方で、武井・鈴木・土井・土井・富岡・廣田・泉・目良（2017）は、児童青年期から精神科外来に通院を継続している高機能のASD患者のほとんどが、知能が高くても成人後の就労が困難であると述べている。また、井上・菅野・横田・橋本・霜田（2007）は、青年期・成人期の発達障害者の中にはサポートの有無に関わらず社会適応が上手くなされている者もいると述べており、一口に発達障害者と言っても、個人によって幅広い差があることが示されている。発達障害の支援において個人差は非常に重要な点であると言えるが、この個人差が発達障害者への支援を困難なものにしている要因の一つでもあり、この個別性には、発達障害の程度だけでなく、成人期に至るまでの様々な体験が関係していると考えられる。そこで、本研究では成人期の発達障害当事者3名（ADHD 2名、ASD 1名）にインタビューを行い、これまでに感じてきた困り感と、それらをどう受け入れ、どのように対処してきたのか、その対処の変化過程について尋ね、当事者の視点から発達障害者への支援のあり方について検討した。その際、分析は木下（2007）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて行った。

発達障害の当事者は自身の特性や置かれている環境に応じて、様々な困り感を有しており、それらの困り感に対する対処行動は、障害の受容を得ることで、自分なりの対処行動から、自身の特性を踏まえたものに変化していた。以上のことから、当事者が周囲との違いを自覚したときに、自身の特性についてきちんとした知識を得る機会があれば、自身の特性に対する認識が変わり、それが自身の困り感への理解や対処に影響して、早い時期からより特性に沿った対処を行えるのではないかと考えられる。また、外見上に障害が表れないことや、発達是不均衡で個人差があることなどから、周囲の理解を得にくく、周囲からの評価と自身の困り感が必ずしも一致していなかったが、診断という形で障害が明確化され、周囲にも特性が受容されるようになったことで、当事者以外の捉え方も変化し、当事者がより社会に適応しやすい環境に変化していた。このことから、当事者にとっては他者から与えられた具体的な支援と共に、周囲の理解と障害受容も大きな助けとなる可能性も示唆された。よって、今後は発達障害者の継続的な支援と共に、当事者だけでなくその周囲も含めての障害受容を促すような働きかけを行っていくことを視野に入れた支援が必要であると考えられる。